

ももふもふ相棒と
異世界で
新生活!!

神の愛し子?
そんなことは
知りません!!

4

著 ありぽん

イラスト .suke

主な登場人物



エセルバード

アリスターのお父さん。
里で一番強いドラゴン。



クラウド

カナデたちの護衛をするドラゴン。



ウィバリー

人間。
エセルバードの親友。



イングラム

ワイルドウルフの群れの長。



エンシェントドラゴン

封印から蘇った非常に強い竜。
謎の男と奴隷契約を結ばされている。

アルフォンス

ハイエルフ。
エンシェントドラゴンとは古い付き合い。



クルクル

ホフティーバードの子供。
姿を隠してみんなの様子を見守っていた。



アリスター

ドラゴンの子供。
まだ人間の姿にはなれない。



フィル

元はカナデが助けようとした子犬。
神獣フェンリルに生まれ変わる。

望月奏

もちーづき かなで
元中学生。
神様の手違いで2歳児として異世界に転生した「神の愛し子」。

1. 今の状況

ドラゴンの里の長おさをしている私——エセルバードは、自分の執務室にいた。私の目の前には、他のドラゴンの里の長おさであるアーチボルトとマリウスがいる。

私たちはともに、エンシェントドラゴンと彼を奴隷として使役する人間や獣人たちの襲撃に遭あった。脅威きょういそのものはなんとか退けられたが、妻のアビアンナや息子のアリストたちとともにいた『神かみの愛いとし子こ』のカナデとフェンリルのフィル、そしてホフティールバードのクルクルは、エンシェントドラゴンに連れ去られてしまった。

今は、これからのことを検討しているところだ。

『それで、向こうは向こうで、動いている最中なんだな』

アーチボルトが口を開いた。

『ああ、先ほどアリアナから連絡があった』

アリアナは我が家のメイドで、アビアンナたちと行動をともにしていた。

『そうか、とりあえずお前の妻と息子が無事でよかった。それで、今どうしているのだ？』

今度はマリウスが言った。

『別の避難場所にいる。様子をみてこちらに戻ってくるか決める、と。それとは別に、他の者が先

にある男を連れてくるらしい。やつらの仲間で、かなりの情報を持っているようだ。すっかりとは分かっていないが、どうもやつらの中でもかなり上の人間だとか。だが、すぐに話を聞けるかどうか』

『なんだ、どうした？ ああ、アビアンナがやりすぎて口が利けなくなったか？ なら、すぐにグッドフォローに治療させればいいだろう』

『いや、確かにそうなんだが……やつは捕まる瞬間、自ら命を絶とうと、呪いを使ったらしい。それを無理やりアビアンナが止めてだな。命は取り留めたのだが、無理やり止めた反動か、気絶してから意識が戻らないという』

『呪いを無理やり止めたのか!? ハハハッ！ さすがアビアンナだ！』

アーチボルトが笑った。

『おい、笑いごとではないぞ。もし失敗していたら、アビアンナが危なかったんだ。まあ、さすがというのはあっているが』

マリウスがアーチボルトを軽く諷めた。私も呆れて、つい溜め息が出る。

『はあ、まったくアビアンナは。でだ、その意識の戻らない男を、なんとか起こさないとイケない。呪いを強制的に止めたからな、止めたまではないが、目が覚めるかどうかは分からない』

『そっちは分かった。で、俺たちはまだ会ったことはないが、「神の愛し子」の方は？』

マリウスが話題を変えた。

『カナデの方は今、ウィバリーとイングラムたちが追っている。本当ならすぐに私も追いかけたい

ところだが、今、ここを離れることはできないからな』

ウィバリーは人間、イングラムはワイルドウルフで、どちらも実力は十分、信頼にも足る男だ。また彼らには、カナデの護衛であるクラウドと私の甥のジェロームが同行している。彼らだけでも目的は果たせるだろう。

『まさか、人間や獣人たちが、あれほどの力を持っているとは』

『フンッ、どうせ何かやってんだろう。本当に力のあるやつは十数人つてところだ』

マリウスの呟きに、アーチボルトは鼻を鳴らした。

『それでも、やつらを率いている者。あれの実力は本物だろう。こちらをやつらを止めなければ、まずいことになる』

私はアーチボルトに警戒を促した。

彼は面倒くさそうな顔をするが——突然真剣な面持ちに変わった。

『お、あっちが動いたみたいだな。俺が行ってくる、何かあれば連絡を』

『気をつけろよ、アーチボルト』

『お前は加減を忘れて、自分自身に被害が及ぶときがあるからな』

『フンッ、俺を誰だと思ってんだ』

私とマリウスの言葉を背に受け、アーチボルトが部屋から出ていった。それに続けて、マリウスも様子を見てくると部屋を出ていき、ここには私一人になった。

これからこの里に連れてこられるという男は先ほど、アーチボルトたちと話した通り、かなりの

情報を持っていて、敵組織の中でもかなり上の立場の人間らしい。

この男は、アビアンナに捕まりそうになると、自害をするために自分に呪いをかけようとした。本来ならそれで死んでいたはずなのだが、アビアンナが無理やりそれを止めた。私でも止められるかららない呪いを、だ。

報告してきたアリアナに、どうやって止めたのかを聞けば、そのときアビアンナはカナデが攫^{さら}われたことを気配で感じ取り、かなりキレていたという。まあ、アリストアも攻撃を受けたからな、一氣に怒りが噴き出たのだろう。

何十発もビンタをして、無理やり呪いを祓^{はら}ったらしい。

『ビンタで?』と、アリアナに、思わず聞き返してしまっただが、魔力を溜^ためた状態で何度もビンタをしたおかげで、呪いを消すことができたようだ。

本来呪いに触れるのは、とても危険な行為だ。下手をしたら自分にも呪いがかかる可能性がある。まったく、なんて無茶をしたのか。その影響で今は眠ってしまっているが、それでも男を生きて捕まえられたのはいいことだ。これでやつらのことについて、何か分かれば……

私が相手をしていたあの首謀者と思われる男、そして男のそばにいた者たち。やつらはかなりの力を持っており、ドラゴンの私たちと、ほぼ互角に戦っていた。そのため、私はここを離れられなかった。それは、アーチボルトやマリウスも同じだった。

しかしそんなやつらが、カナデが攫^{さら}われてから少しして、なぜか急に退き、今は我々の里から少し離れた場所に集まっている。

あの首謀者の男は一体何が目的だ? なぜカナデを攫^{さら}った? カナデが『神の愛し子』と分かっているのか? もしそうならば、いつ『神の愛し子』とバレた? いや、『神の愛し子』はまったく関係なく、別の理由でカナデを捕らえようとした?

わざわざエンシェントドラゴンに、自分の命を捧げて奴隷契約までして? 分からないことばかりだ。本当に、今から運ばれてくる男から何か情報を聞き出せばいいが。その前にまた戦いが再開されれば、尋問^{じんもん}どころではなくなってしまう。

いずれにせよ、カナデを取り戻すことが最も大切だ。それさえできれば、こちらもなんとか対処できるだろう。今はウィバリーやイングラムたちが追ってくれているが――

*

「それでこれからどうするの? 色々想定外のことが起こっているみたいだけど? 悪い方の意味でね」

「ミランダ、口を慎^{つつし}め」

私――コースタスクの組織の幹部、ミランダとビルトルートが言い争っている。

「だって、本当のことじゃない。予定だったら今頃もう子供を攫^{さら}って、ここから離れていたはずなのよ。それでゆつくりと温泉に浸^ひかっていたはずだったのに。もう、ドラゴンとの戦いで、体になり汚れちゃって、気持ち悪いったらありやしない」

「お前は一体、ここへ何をしに来ているのだ」

「あら、私はここへ、楽しむのみに来ているのよ。あとはついでよ、ついで。そしてあとの楽しみのためにも、ここでのことは成功してほしいから、こうして話をしに来ているのよ。戦う理由は違うけれど、あなたたちの最終目的と、私の楽しみは同じ。私がここにいる理由はそれよ」

「なぜお前のような者が……はあ」

「ついでに言わせてもらうけど、互角にドラゴンと戦っているといっても、正直私たちの方がやっぱり押されているのよ。まあそれは、さすがドラゴンっていったところだけれど。このままだとまづいんじゃないの？」

「お前たち、少し静かにしろ。今、これからのことを考えている」

見かねた私がそう言えば、ビルトルートとミランダはすぐに黙った。今、私のところにいる幹部はこの二人だけだ。他の者は、それぞれの持ち場で待機させている。

私たちはドラゴンたちとの戦いを一時中断し、エセルバードの治めている里から、少し離れた場所まで移動していた。いくつか想定外のことが起こったからだ。いや、考えてはいたが、その考えを上回ったと言った方が正しいだろう。

まず一つ目として、エンシエントドラゴンが奴隷契約に対して二度目の抵抗を示したのだ。

子供を捕らえるべく移動しているときの一回目の抵抗では、私はすぐそれに気づいた。もともと奴隷契約は、もし奴隷が抵抗をすれば分かるようになっていて。しかし私の場合は、それに加えて自分の命をもとにして奴隷契約をしているため、普通の奴隷契約よりも、さらに相手のことを細か

く感じ取ることができた。

エンシエントドラゴンの抵抗は数十分続き、そしてついに奴隷契約による罰が発動した。

それからすぐに、その場にいた幹部のピロートから連絡が入り、詳しい状況を聞いた。そのときの抵抗具合は、あの時点でのエンシエントドラゴンの力を考えると妥当だった。それくらいならば奴隷契約が破られるおそれはなかったため、そのまま子供を追わせることにした。

だが、それから数時間後、子供に追いついたであろう頃に、またエンシエントドラゴンが抵抗したのだ。しかもその抵抗は、私の考えを遥かに超えるほど強いもので、子供とフェンリル、そして鳥を連れて、そのままどこかへ飛び去ったという。

私の考えでは、エンシエントドラゴンの力は一回目のときと二回目のときで、そこまで変わらなはずだった。

確かに子供のもとへ着く頃には、かなり力が戻っていただろう。ただ、それ以前でも力はかなり戻っていたため、そう考えていたのだ。

完全に私の考えが甘かった。そのため、少し予定が狂ってしまった。

私は、エンシエントドラゴンが子供を攫ってきたら、ドラゴンの森は部下たちに任せ、自分は子供を連れて、すぐ別の場所へ移動しようと考えていたのだ。

ただ、どれだけエンシエントドラゴンが抵抗しようとも、これに関しては計画の時間が遅くなるだけで、重大な問題ではない。

そもそも、あの奴隷契約には魔法が付与されている。その魔法が発動すれば、エンシエントドラ

ゴンは強制的に私のもとへ戻ってくるのだ。

なぜ子供を連れ、ここから離れたかは知らないが、戻ってくるときに、結局は子供も連れてくることになる。

どちらかと言えば、もう一つの想定外の方が問題だ。ピロートが意識のない状態とはいえ、ドラゴンに捕らえられたことだ。

私はピロートだけではなく、幹部全員に、そしてその幹部の下の者たち——そう、使い捨ての者たち以外の全員に、敵に捕らえられそうになった場合、自害する呪いを覚えさせていた。

それはそこそこ知られているような弱いものではなく、確実に自害できるほどに強力なものにしていた。捕らえられそうになったピロートは、その呪いを使ったそうなのだが……

まさかエセルバードの妻、アビアンナというドラゴンが、その呪いを消してしまうとは思いませんでした。

なぜあの強力な呪いを消すことができたのか。報告では頬を何発か叩くことで呪いを消してしまったとあるが……そんなことがあるのか？ これは本当に予想外だった。

ピロートだけでも厄介なのに、また捕まる者が出てくるかもしれず、面倒なことになりかねない。「それで、これからどうするの？」

「エンシェントドラゴンと子供の方は、そのうち強制的に戻ってくる」

ミランダには事実だけを伝えておく。

「念のために、ジェルロウを向かわせている。あちらはジェルロウに任せ、こちらはできる限りド

ラゴンと魔獣を減らすぞ。これからのことを考えれば、どの道このドラゴンたちは邪魔な存在になるからな」

「しかしミランダではありませんが、ここへ来てから、あまりドラゴンも魔獣も減っていませんね」ビルトルートが口を挟んだ。

「ふん、そこはさすがドラゴンとこの森に住む魔獣といったところだ。が、あの方が復活されるまでは、これ以上私たちの力を上げることができない。それに向こうには、かなりの力を持った治療師がいるからな。だが、それでも邪魔な者は消さなければいけない。お前たちはそのまま、自分たちの持ち場でドラゴンたちをなんとか消せ」

「かしこまりました」

「分かったわ。様子を見てまた仕掛けるわ。それでいいでしょう？」

「ああ」

ビルトルートとミランダが私の前から消える。そうだ、これからのために今は少しでもドラゴンたちを消しておかなければ。そしてその合間を縫って、これからドラゴンの里へ連れていかれるピロートの対策をせねば。移送の隙をつき、殺せるのであれば殺す。少なくとも、口は封じねばなるまい。

それにしても、エンシェントドラゴンは、罰を分かっている、強制的に戻ることを分かっている、なぜ子供を連れていったのか。あの子供には私が気づいていない、何か秘密があるのか？

『ねえ、あれは何？』

「あしよこ、にやにがありゆによ？」

『むこうの、ちやいるのところ、なになの？』

クルクル、僕——望月奏、フィルが、口々に言います。今はエンシエントドラゴンおじさんに捕まって、空を移動中です。

『あつ！ あの青いのは？』

「ありえ、みじゅうみかにゃあ？」

『おさかないっぱいな!?』

『……はあ、お前たち、静かにしていると云っただろう』

エンシエントドラゴンおじさんが呆れたように言いました。

えゝだつて暇なんだよ。ずっとエンシエントドラゴンおじさんの足に包まれて飛んでるだけなんだもん。ちなみにクルクルはポケットから顔だけ出しています。

僕たちは二日くらい飛んでいます。

そんなに遠くまで来なくても思っていたんだけど、エンシエントドラゴンおじさんは、なるべく離れないとダメだとか、なるべく遠くへとか、ブツブツ言っていました。

もちろん、ずっと飛んでいたわけじゃなくて、何回か地上に降りています。降りるとすぐにエンシエントドラゴンおじさんが、その辺の木になつていた木の実や果物を、風でバサバササツと採ってくれました。

それを食べると、トイレに行けつて言われて、草むらで隠れて済ませた後は、そこをクリーンで綺麗にしました。それから、食後の休憩を少しだけして、また空を飛びます。ずっとその繰り返しでした。

逃げ出そうとしなかったか？ それはしなかったよ。だって僕たちが、エンシエントドラゴンおじさんから逃げられるわけもないし。

もし逃げられたとしても、今、自分たちがどこにいるかも分からないのに、どうやってエセルバードさんたちの、ドラゴンの森に戻ればいいのか？ 絶対その辺を彷徨うことになって、その間にまたエンシエントドラゴンおじさんに見つかっちゃうもん。

そんな、ほぼほぼ何もできない、世界を知らない僕たちにできることって？ 何もできないなら、エンシエントドラゴンおじさんの言うことを、聞いてる方がいいでしょう？

エンシエントドラゴンおじさんは、僕たちのことを殺すつもりはないって言いました。初めの頃は信用ができないでいたけど、これまでのエンシエントドラゴンおじさんの僕たちに対する態度を見ていたら、その言葉が本当のことだつて思えてきたよ。

さつきご飯のときにフィルたちと、エンシエントドラゴンおじさんに聞かれないようにそう話しました。だつて殺すつもりなら、最初に僕たちと会ったときに殺してるはずだもん。

また、僕に聞きたいことがあったとしても、その話をさっさと聞いたらすぐに殺してしまうと思います。それが無いことは、本当に僕たちを殺すつもりはないんじゃないかってことになりました。だから今は、大人しくエンシエントドラゴンおじさんについていくことにします。でもそうなる

と、どこまで行くか知らないけど、やる事がなくて暇です。マジックバッグからおもちやを出して、遊ぶわけにもいきません。けれど、地上をただただ見ているのも飽きました。

それで今、色々エンシエントドラゴンおじさんに質問していたんだよ。静かに運ばれてるんだから、それくらい聞いてもいいでしょう？

『ねえ、あれは何？ あそこのゴワゴワしてるところ』

「あつちは、もにやもにや」

『あつ！ まつくろがあるなの！』

クルクル、僕、フィルがまた言います。

『だから静かにしている！ はあ、なぜこんなうるさいのか……あいつもそうだったな』

ん？ エンシエントドラゴンおじさん、最後なんて言ったの？ 声が小さくて聞こえなかったよ。

『ねえ、あれは何！』

クルクルがエンシエントドラゴンおじさんに尋ねます。

『あれは、岩の山だ。岩だけでできている珍しい岩山だ』

「もにやもにやは？」

『もやもやのことなの』

僕がうまく喋れないのを、フィルがフォローしてくれます。

『……あれのことか？ あれは湿地帯だ。緑のもやもやは苔が広がっている場所だ』

『くろは、なになの？』

またフィルが聞きます。

『あそこは炭でできている谷だ。周りも炭だらけで、あそこに行ったら真っ黒になるぞ』

『まつくろ！ たのしそうな！ おえかきできるなの！』

『じゃあ、あれは？』

今度はクルクルです。

『まだあるのか？ はあ、まったく』

なんだかんだ言いながら、エンシエントドラゴンおじさんは、僕たちの質問に全部答えてくれます。そんなことをしているうちに、二日目も夕方に。向こうに綺麗な夕陽が見えてきた、そのときでした。

『おい、見えてきたぞ。我はあそこに向かっている。日が落ちるまでには着くはずだ』

え？ エンシエントドラゴンおじさん、着いたの？ 僕たちは進んでいる方向を見ます。うーん、よく分かんないや。フィルたちに何か見えるって聞いたけど、フィルたちも何も見えないそうです。『お前たちにはまだ見えないか。もう少しすると、色々な色が見えてくるぞ。我はそこに向かっているのだ』

僕たちは話をやめて、エンシエントドラゴンおじさんが言った、色々な色が見えてくるのを待ち

ます。そして数分後――

『あつ!! 何か見えてきた!』

『ボクもみえたなの!』

「ぼくもみえちゃ!!」

クルクル、フィル、僕が声を上げます。

それはまだ、一本の線にしか見えなかったけど、でもただの線じゃなくて、色々な色でできていました。赤に黄色、緑に青、水色にピンク、白にだいたい色。本当に色々な色に見えます。

さらにまたまた数分後には、色々な色が一面に広がってきました。その色々な色に夕陽が当たって、とっても綺麗に見えました。

「あしよこ、いく?」

僕はエンセントドラゴンおじさんに聞きました。

『ああ、あそこへ行く。だから、もう少しだけ静かにしていてくれ』

『あれなにかなの』

『うゝん、色々な色の岩?』

「いりよいりよにや、いりよによ、き?」

フィルが言ったあと、クルクルと僕も喋ります。

『まじゅうが、あつまってるなの! おやしきのまわりも、いろいろないろのまじゅう、いたなの!』

フィルと一緒に盛り上がる僕たち。静かにしろって言われたけど、あんなに綺麗な場所を見たらね……何があるのか気になるでしょう? ああでもない、こうでもない、と盛り上がります。

『おい、だから我は静かにしていろと……』

『ねえねえ、あれはずっと向こうまで続いているの、それともあそこだけ?』

『きれい、いっぱいなの?』

「いっぱいがいい、いっぱいけりえい、みんなしゅき」

『『ねえ』』

『……はあ、そうだな。綺麗がいっぱいいいな……確かに我はお前たちを殺す気はないが、そして殺さないと伝えたが、もう少し警戒した方がいいのではないか?』

エンセントドラゴンおじさんは、クルクル、フィル、僕に呆れるように言った後、降下を始めました。そうすると、その色々な色もつとハッキリ見えてきたよ。

「わああああ!! しゅごいねえ」

『いっぱいなの!! フワフワなの!!』

『ボク、こんなに綺麗がいっぱい初めて。ドラゴンの森にはなかった。たぶん? 行った場所にはなかった』

僕、フィル、クルクルはさらに盛り上がります。

そして、その色々な色の真上に着く少し前、それがなんなのか判明しました。それは、どこまでも続いている花畑でした。僕たちは大興奮です。だって本当に凄いです。

花畑の上を飛びはじめて、改めて前の方を見ても、花畑が終わっている様子はなく、見たこともない、可愛い花、カッコいい花、ヘンテコな形をしている花、色々な花がどこまでも咲いていた。

しかも、カラフルな花が夕陽に照らされて、風でゆらゆら揺れているもんだから……

フィルが言った通り、フワフワしている感じもするし、とっても綺麗だし、こんなに凄い場所があるなんて。

きっと地球にもないはずだよ。よく大きな公園とか、外でみんなが遊べる施設とかで、季節によつては、たくさん綺麗な花を見ることができると。もうね、そんな感じじゃないの。

本当にどこまでもどこまでも花畑が続いていて、もしかしたらドラゴンの里と同じくらいの広さがあるかもしれません。

そんな凄い花畑を見て、僕たちはエンシエントドラゴンおじさんの足の中で、思わず暴れてしまいました。パシパシ目の前の指を叩いたり、少しだけ飛び跳ねたり。フィルも軽くジャンプしながら遠吠えをしたり、しつぽでバシバシ叩いたりします。

クルクルも完全には僕から離れないものの、僕のポケットから出てきて、ポケットのボタンに足を引っかけてバサバサ羽を動かしたり、ピピピピ、ピロロロって歌を歌いはじめたりしました。

『お前たち、感動したのは分かったから、もう少し静かに……』

『ねえ、どこまで続いているの！』

『した、おりたいなの！』

「あち、はにゃかわいい！」

エンシエントドラゴンおじさんは注意するけど、クルクル、フィル、僕の興奮は収まりません。

『……はあ、もうすぐ降りる。だから待っている。ほら、あの岩場が見えるだろう。あそこの前に降りるんだ』

エンシエントドラゴンおじさんの教えてくれた方を見ると、花畑の中に大きな岩と小さな岩が積み重なった小さな山がありました。

エンシエントドラゴンおじさんは徐々に降下していきます。僕たちはさらに興奮しました。そして――

『さあ、着いたぞ』

エンシエントドラゴンおじさんは、完璧な着地で、岩の山の前に降りました。いつも思っていたけど、僕たちを包んでいる足で、よく綺麗に着陸できるよね。しかも、僕たちを地面で擦ったりしないです。それにね、ぜんぜん反動がないんだよ。フワッと降りるの。これも結界のおかげなのかな？

それはともかく、小さな山と思っていたものは、地面から露出している岩盤で、それがいっぱい重なって、岩の山に見えていたみたいです。

その岩盤には大きな穴が開いていて、中に入れるようになっていました。暗いからどのくらい奥まで続いているかは分からなかったけど、見た感じ、結構奥まで続いているそうです。

『さて、我は中を調べてくる。お前たちはそうだな、その辺の花でも見て待っている。結界は張っ

てあるから安心しろ』

そう言うと、エンシェントドラゴンおじさんはさつさと洞窟の中へ入っていききました。僕たちは言われた通り、そして「待ってました！」と、すぐに花畑の方へ行きます。

近くで見ても、やっぱり綺麗でフワフワで、とっても可愛い花畑でした。上から見たときも感動して、こうして近くで見てもまた感動します。

それに、上から見ていたときは気づかなかったけど、花畑には虫や小鳥がいっぱい集まっています。ただ見える限り、大きな虫や大きな鳥魔獣はいません。みんな、花畑に降りてくると、花に隠れて見えなくなっちゃうくらいの大きさです。

ちなみに、エセルバードさんのお屋敷で図鑑を見せてもらったときに、虫にも様々な大きさがあるって教えてもらいました。

小さい虫、中ぐらいの虫、それから大きな虫、色々な虫がいます。

小さな虫は、僕の手の指先ぐらいの大きさから、僕と同じぐらいの大きさまでの虫が、小さい虫に分類されています。中ぐらいの虫は、僕よりもぜんぜん大きくて、僕なんて潰されちゃうくらい。大きさを言うと、人が使う三人がけソファを五つ重ねたくらいまでが、中ぐらいの虫だって。

それ以上が、大きな虫に分類されています。なんと、ドラゴン姿のエセルバードさんと同じ大きさぐらいの虫もいるらしいよ。まあ、そういう虫は、特別な場所にしかないみたいだけど。

それで、今この花畑には、見た限り小さな虫しかいません。うん、小さな虫ばかりでよかった。

大きな虫がいたら、この綺麗な花畑がボロボロになるところでした。

鳥も同じです。大きな鳥魔獣だけじゃなくて、ただの鳥でも、様々な大きさの鳥もいるからね。

鳥も小さい鳥ばかりでよかったです。花畑がボロボロになるだけでなく、今頃僕は羽ばたきで飛ばされていたかもしれません。エンシェントドラゴンおじさんが結界を張ってくれているから、大丈夫だとは思うけど。

それに、今は僕の盾がないから、自分の身を守れません。エンシェントドラゴンおじさんに連れてこられたとき、盾はクラウドと一緒に飛ばされてしまいました。盾が壊れてないといいな。

そんなことを考えながら、最初は花畑の中に入らないで花を観察していた僕たちは、ちよつとだけ花畑の中に入ってみることにしました――

『……これは一体どういうことだ?』

十五分くらいして、後ろからエンシェントドラゴンおじさんの声がしました。振り返ると、そこにはドラゴンじゃなくて、人が立っていました。この人は、エンシェントドラゴンおじさんが変身した姿みたいです。彼は僕たちをジト目で見ていました。

僕たち何か変? 別に変なことないと思うんだけど。

『どうということ?』

『なんなの?』

「ぼくたち、へん?」

クルクル、フィル、僕たちが言います。

『いや、別に変ではないが……いやいや、やはりおかしいな。どうしてお前たちの周りに、それだけの虫と鳥が集まっているんだ』

僕たちの周りには今、そこら辺にいた虫たちと鳥たちが集まっています。花畑に入ってすぐね、僕たちに気づいたみんなが、どんどん集まってきたんだ。

呼び方が合っているか分からないけど、イモムシやケムシ、チョウにトンボにとう虫、カマキリにハチにカブトムシにクワガタ……他にもいっぱいいます。まあ、完璧に地球と同じ姿だったり、ちよつと違ったり。

それから鳥の方は、もちろんクルクルと同じで、まだまだ子供の鳥もいます。でも、なんと僕の手ひらサイズ——クルクルと同じくらいの大きさなのに、もう大人の鳥もいました。クルクルに聞いたところ、ドラゴンの森では見たことがないって言っていました。

あと、ここにいる虫や鳥はみんな仲良しで、いつもこの花畑で遊んでいるんだって。ちなみにこの花畑と、少し花畑から出たところでは行動しないみたい。周りの森には行かないみたいです。

そんな話をフィルとクルクルに通訳してもらった数分後、僕たちの周りは虫と鳥でいっぱいになりました。周りに集まっただけじゃなくて、僕の頭、肩、体全部にくっついていたり留まったりします。フィルの背中も体も虫と鳥だけです。

そんなことをしているうちに、エンシエントドラゴンおじさんが戻ってきたんだよ。ね、みんなが集まっているだけで、特に変なことはないでしょう？

『いや、どう考えてもおかしいだろう。そんなに時間が経っていないのに、なぜ皆が集まる』

そう言われてもねえ。みんなで顔を見合わせます。

『まあ、それもあとで聞く。とりあえず洞窟の中へ入るぞ。ついてこい』

僕たちは、エンシエントドラゴンおじさんの後ろを歩きはじめました。スタスタ歩いていくおじさんに僕がついていけるわけもなく、どんどん距離ができてしまいます。フィルが急いで僕を背中に乗せてくれるけど、上手くいなくて、わたわたししていました。

すると、エンシエントドラゴンおじさんが戻ってきて、僕を抱っこしてくれました。それでまた歩きはじめますが、今度は別の問題が出てきました。

僕たちの周りに集まっていた虫や鳥たちが、ぞろぞろついてきたんです。早く動けない子や飛べない子は、別の虫や鳥が運びながらぞろぞろとね。

『なぜ、皆ついてくるのだ？』

『ひびっ!!』

『ひゅびゅび!!』

『シュウウウ!!』

『ジュー、ジュー!!』

鳥たちだけじゃなくて、虫たちまで何かを訴えていて、エンシエントドラゴンおじさんはうなずきました。『分かった、分かった。が、それはあとだ。我には時間がないのだ。おそらく我はここから、戻る

ことになるだろう。その後はおそらく、あやつがこの者たちの面倒を見てくれるはずだ。気配が近づいてきているからな。そうしたら自由にしてくれ。今はダメだ』

それを聞いて、ぶすつとなる虫と鳥たち。クルクルに聞いてみたんだけど、みんなは僕たちと一緒に行きたいって言ってたみたい。でも、エンシエントドラゴンおじさんはダメだつて。

それでも虫と鳥たちはなかなか引きません。最後は、絶対にあとで一緒に遊ばせてつてエンシエントドラゴンおじさんに約束させていました。それでようやく、虫と鳥たちは花畑に戻っていきます……何回も僕たちの方を振り向きながら。

『はあ、これで中に入れる』

エンシエントドラゴンおじさんは洞窟^{どうくつ}に向かって、再び歩きはじめます。洞窟^{どうくつ}の入り口は光魔法で少し明るくしてあって、奥の方はもっと明るくなっていました。

中に入ると、エンシエントドラゴンおじさんは入り口に向かって手をかざします。何をしたのか聞いたら、外から中が見えなくなる魔法をかけたんだつて。入り口の前に来ても、そこに洞窟^{どうくつ}があるなんて分からず、ただの岩盤に見える魔法だそうです。

『話の邪魔をされたくないからな。まあ、あやつには関係ないが』

あやつ？ 少し進むと、かなり開けた場所につきました。エンシエントドラゴンおじさんは僕を降ろして、それから木の葉をいっぱい用意したから、その上に座れて指差しました。

エンシエントドラゴンおじさんの指差した場所には確かに、いっぱいの木の葉の山が二つと、小さな木の葉の山が一つありました。小さいのはクルクル用です。

みんなでそちに歩いていつて、木の葉の上にそつとそつと座つてみます。

おおお！ おおおお!! これは!! まさかこんなに木の葉の座布団がふわふわだなんて!!

もしかして、エセルバードさんのお屋敷の、あのふわふわソファよりふわふわなんじゃ？ た

だの木の葉だよ？ どうしてこんなにふわふわなの？

『どうだ。お尻は痛くないだろう？』

僕たちはぶんぶん頷^{うなず}きます。

『それから、これも用意した。話をする前に、喉^{のど}を潤^{うる}した方がいいと思つてな』

おじさんが手を軽く上げると風が吹いて、別の場所から木の葉が飛んできました。そしてその木の葉が地面に敷かれると、次は果物と木の実が飛んできてその上に載ります。

『それを食べたら、話を始める』

僕たちはすぐに果物と木の実を食べはじめました。そんな僕たちを見たり、周りを見たりしながら、エンシエントドラゴンおじさんは小さな声で、何か独り言を呟^{つぶや}っていました。

『ここは昔と変わりはないな。中が無事でよかった。それに、木の葉と食べ物も、昔と変わらずに豊富でよかった。ささつと集めただけで、かなりの量になったからな。ふむ、話が終わったら、もつといい寝所を用意してやるか。今の木の葉は座る用にして……』

『カナデ、おいしいねなの!』

「うん、おいしいね、ふいりゅ!」

『ボク、この木の实好き』

『……あと三日くらいなら余裕があるからな。その後は最後まで面倒をみられなくて悪いが、あいつにお前たちを任せ、我はお前たちから離れなければ。強制的に帰される前に、できるだけ遠くに……』

ご飯を食べたあとは、エンシェントドラゴンおじさんが僕たちにまとめてクリーンをかけてくれて、顔も体も綺麗になりました。果物の汁で、顔も体もべちゃべちゃだったからね。

それから、僕たちが汚しちゃったところも綺麗にしてくれました。全部終わってから、エンシェントドラゴンおじさんは、僕たちの前にドシンツと座ります。このときおじさんはドラゴンの姿に戻っていました。

ただ、洞窟どうくつに合わせたからなのか、最初に見たときよりもぜんぜん小さいサイズです。どうも好きなように、体の大きさを変えることができるみたいだよ。でもね、わざわざ小さくなってまでドラゴンの姿になるより、そのまま人の姿でいいんじゃないのかなって思ってた……

久しぶりに人間の姿に変身したから、なんか疲れちゃったんだって。まだ元々の姿、ドラゴンの姿で小さくなってる方が楽みたい。まあ、みんな楽な方がいいからね。それに、僕たちはエセルバードさんたちで慣れてるから、ドラゴン姿でも問題ありません。

人によつては、初めてドラゴンと会うと気絶しちゃう人たちもいるそうです。だから、エンシェントドラゴンおじさんは、僕たちが怖がらないで話できてよかったって言いました。その話が終わると、エンシェントドラゴンおじさんは本題に入りました。



『それで、お前は何者だ？ お前の気配、私の知っている者とそっくりだが、外見がまったく違う。それに、ここに飛んでくるまでの間、お前を観察していたが、性格もまったく違う』

何者？ 僕は僕だよ。ここはきちつと自己紹介した方がいいよね。その方がエンシェントドラゴンおじさんも、僕のことの方が分かるだろうし。

「ぼくによにやまえは、かにやでしゅ」

『ボクはフィルなの!! なまえ、カナデがかんがえてくれたなの! とつてもカッコいいまえなの!!』

『ボク、クルクル。ボクの名前もカッコいいでしょう』

「しよれかりや、みにやかじよくで」

『いつもいつしよなの!!』

『うん、ずっと一緒。バラバラにならない』

うん、これではつちり! みんなでうんうんって頷きます。でも――

『いや、我が聞いているのは、お前たちの自己紹介ではない。お前が……カナデと言ったか。カナデ、お前が何者か聞いているのだ』

えゝ今自己紹介したじゃん。何者って、だから僕はカナデだよ。それしかないでしょう? あつ、もしかしてもっと詳しい方がよかったとか?

「えちよ、いまは、どりやごんによ、しやといりゅ。ちよつちよまえ、きちや」

『うん、ちよつとまえに、アリストアのおうちきたなの』

『ボクも!』

『いや、だからな。なんと聞けばいいのだ? ……お前は人間ではないだろう? いや人間だが、

ただの人間ではないはずだ』

ん? 人間だけ人間じゃない? そのとき、クルクルが僕の肩に乗ってきて、小さな声で僕にだけ聞こえるように言いました。もしかしてあれじゃないかって。そう『神の愛し子』のことじゃないかって。

ああ!! 僕は手を叩きました。確かにそれなら、僕は人間だけど、『神の愛し子』ってやつでもあるよね。どういう存在か、いまいち分かかってないけど……

「えちよ、もひとちゅ。でもぼく、よくちらにゃい」

『それはなんだ?』

「みにやときどき、『かみによいとちゅ』っていう」

『……やはりそうか。お前は「神の愛し子」か。私が感じた通りだったか』

ん? もしかしてその言い方だと、僕が『神の愛し子』って知ってた感じ? なら別に、僕にわざわざ聞かなくてもよかったんじゃないかな。

『しかし、それが確認できたところで他の、あいつのことに關しては、まだ分からないな。どうしてお前からあいつの気配がするのか……お前、我と出会ったのは初めてか?』

それはもちろん。大体、僕がここに来て、会ったことがある人なんて、そんなにいないからね。もしエンシェントドラゴンおじさんみたいな人に出会っていたら、忘れるはずがないし。これで忘

れてたらおかしいでしょう。

『ボク、おじさんじゃないなの』

『ボクも知らない』

フィルとクルクルも言います。

『お前たちは知らなくて当たり前だ。お前たちのように、生まれたばかりの者たちが我を知っていたら逆に驚きだ』

『なら、カナデも同じ。カナデはボクたちの中で、一番小さい』

クルクルが言いました。

『確かに見た目は小さいが、あいつの場合、若返ることもできるんじゃないかとな。そして何かの事情で、我に自分が誰なのか話せないでいるのかと、考えていたんだ』

さつきから出てくる『あいつ』って、誰のこと？ それに僕は絶対に、エンシェントドラゴンおじさんに会ったことがないよ。

うーん、エンシェントドラゴンおじさんは、僕の何が知りたいんだろう？ エンシェントドラゴン

おじさんも、もう少し詳しく話してくれないかな。そうしたら、答えられることがあるかもしれないし。

「おじちゃ、あいちゅ、だりえ？」

『おじさんの話、よく分からない。おじさんもボクたちのこと知らない。みんなよく分からないし知らない』

僕とクルクルが尋ねます。

『ボクはフィルなの!!』

うん、フィル、それは分かっているから、ちょっと静かにだよ。クルクルも同じことを考えていたみたいで、静かについてフィルに注意します。

『ふむ。何かの拍子に、記憶が失われた可能性もあるな。少し昔の話をしてみるか』

「むかちのはなち？」

『そうだ、そうすればもしかしたら、お前の記憶が蘇るかもしれん。まったくの別人ならば、あまり意味はないが。別人ならばそれはそれで、ここへ連れてきた理由を、お前たちにきちんと話さなければならんしな』

今までは背筋を伸ばして、力が入っていた感じだったけど、エンシェントドラゴンおじさんが深く座り直して、もつと楽な姿勢になりました。

『我は昔、ここに住んでいたことがある。そしてここで、ある者に会った——』

2. エンシェントドラゴンおじさんの過去 ある人との出会い

昔々、エンシェントドラゴンおじさんは、この洞窟に住んでいました。どのくらい昔かっという、ドラゴンの森に今住んでいるドラゴンたち全員が、まだぜんぜん生まれていない頃だつて。

誰も？ セバスチャンよりも？ そう聞いたら、セバスチャンとは誰かって聞かれました。セバスチャンの大体の年齢を言ったら、それよりもっと前だそうです。僕もフィルたちもビックリしました。そんなに昔って、エンシェントドラゴンおじさんは今いくつなの？

『我も、もう歳は分らん。だが、確実にその者たちよりは、もっと昔から生きている』

この場所はおじさんにとつて、とっても住みやすい場所でした。綺麗な花畑が広がっているし、その周りには、ドラゴンの里よりも広い森が広がっていました。

広い森だから、それだけ魔獣もいて、それから木の実に果物もあつて、食料にも全く困らない場所です。

おじさんは綺麗な花畑を見ながら、ご飯を食べるのが大好きでした。ドラゴンの里には、怖い魔獣もいるので、ここの森の魔獣はエンシェントドラゴンおじさんの邪魔をしなかったのって聞いたから、みんなそんな馬鹿なことしなかったって。

『我は誰よりも強いからな。あのドラゴンの里の長よりもな』

周りの森に住んでいる魔獣たちはかなり強いけど、おじさんに勝てるわけもなく、魔獣たちもそれは分かっているから、絶対に手を出してこなかったみたいです。

それに、それだけ強い魔獣がいる森だったから、周りの人間や獣人、他の種族の人たちも手を出してきません。

そんな誰にも邪魔されないで、幸せにまったりと暮らしていたエンシェントドラゴンおじさんの前に、ある日突然、ある人が現れました。

本当にそれは突然で、森に自然に湧いている天然のお酒を飲みながら、月を見て、花畑を見て、まったりしているところへ、頭の上いきなり人間が現れたそうです。

「よう、初めまして！」

『……』

あまりの突然のことに、しかも自分を怖がることなく、敵意も全く感じさせずに挨拶をしてきた人間に、さすがのエンシェントドラゴンおじさんも、驚きで少しの間動けませんでした。

その後、我に返ったエンシェントドラゴンおじさんは、人間を頭から降ろすと、その人間を結界で囲って逃げないように、そして攻撃ができないようにして、尋問をします。

何しろ本当に突然だったからね。近づいてくる気配も一切なく、自分の頭の上に現れたら、そりゃあ、色々聞くよね。今は敵意を見せていなくても、本当はエンシェントドラゴンおじさんを倒しに来たのかもしれないし。

でも、返ってきた答えは——神様からこの世界に送ってもらった。そう、その人間は、僕と同じ『神の愛し子』だったんだ。

名前はアサヒさん。アサヒさん……名前からして日本人かな？ そのアサヒさんによると、神様の何かのミスで、元いた場所で生きることができなくなつて、お詫びにこの世界で生活できるようにしてもらったらしいです。

ついでに、ただ送るのも申し訳ないつてことで、色々加護を貰つて、『神の愛し子』として、この世界に送ってもらいました。

それで、送ってもらったのはいいんだけど、アサヒさんによると本当は、人間が住んでいる村か、街の近くに送ってもらったみたいですよ。

でも実際は、エンシェントドラゴンおじさんの頭の上で、周りには花畑と森が広がっていました。神様が送るところを間違えたんだろうって、アサヒさんは大笑いしてたらしいよ。

いやいやアサヒさん、笑いごとじゃないと思うな。それに今の話、まんま僕たちじゃない？ 神様のミスと、加護を貰って別の世界へ——というか、この世界へ。そして、僕は神様に『神の愛し子』のことは聞いていなかったけど、それも一緒です。

あぐく、送ってもらえる予定だった場所には送ってもらえず、アサヒさんはエンシェントドラゴンおじさんの頭の上で、おじさんの尋問を受けることに。僕とフィルは、僕は二歳児になって、イノシシ魔獣に襲われて……ほら、最後の部分以外、一緒じゃん。

『カナデ、なんのおはなしなの？ おじさん、ボクたちのおはなししてるなの？』

あゝあ、フィルが混乱しちゃったよ。でもそうだよね、そうなるよね。

『違う、フィル。別の人の話してる。昔の人間の話』

クルクルがフォローしてくれました。

『でも、ボクとおなじなの。ボクたちのおはなしなの』

『なんだ？ どういうことだ？』

まだまだ話を聞きはじめたばかりですが、僕は簡単に、僕たちがここに来たときの話をしました。地球のことや僕が二歳になったことは面倒だから言わなかったけど、神様がミスをしたことや、こ

こに来るまでの出来事をね。

そして僕が話している間、フィルとクルクルは、あのダメダメ神様の歌を歌っていました。

話を聞き終わったエンシェントドラゴンおじさんは、大きな溜め息をつきます。僕だって溜め息をつきました。まさか神様が、ほぼ同じことをしていたなんてね。いつかまた再会したとき、文句を言うことが増えました。

『はあ、やつはまたやらかしたのか。しかも、このような幼子の送る場所を間違えるとは。やつは自分の責任というものを、しっかりと考えたことがあるのだろうか？ とりあえず、お前たちのことは分かった』

その後も、エンシェントドラゴンおじさんの話は続きました。それはとってもとっても頭にくる、そしてとってもとっても悲しいお話でした——

とりあえずアサヒさんが間違えてここへ送られてきたことを理解したエンシェントドラゴンおじさんは、知り合いの人間が住んでいる場所へ、アサヒさんを連れていこうとしました。

でも、なぜかアサヒさんはそれを拒否して、ここで暮らすって言ってみたみたいです。ただ、エンシェントドラゴンおじさんがそれを許可するわけもなく、無理矢理にでも連れていこうとしたところ——そこでアサヒさんの魔法が炸裂しました。しかも魔力が暴走しかけて、この場所が吹き飛びそうになりました。

エンシェントドラゴンおじさんはなんとか、その魔力の暴走を結界で防いだそうです。でも、魔

力の暴走が収まったときには、アサヒさんの髪の毛も洋服も、全てがボロボロのごわごわになっていました。エンシェントドラゴンおじさんも頭が少し焦^こげて、そこから湯気^{ゆげ}が出ています。

少しの間、真顔でお互いを見ていたエンシェントドラゴンおじさんとアサヒさんだけど、いきなりアサヒさんが笑いはじめて、止まらなくなっちゃいました。

そんなアサヒさんに、エンシェントドラゴンおじさんは、笑いすぎだって注意します。そして、もしも爆発を起こしていたら、死んでいたかもしれないって怒ったり、エンシェントドラゴンおじさんの住処を破壊するつもりかって怒ったり、他にもこれほどの力を与えるなんてって神様を怒ったりしました。

ただ、今回のことでエンシェントドラゴンおじさんは、このまま人間の世界にアサヒさんを連れていくのはまずいと判断したみたいです。

また、仕方なく、本当に仕方なく、アサヒさんの力を抑えることができる、自分のもとに置くことに決めて、知り合いの人間に、ここへ来てもらうことにしたんだって。

これも僕たちとそっくりだね。魔力の暴走で道を二つ作ったり、ウィバリーさんのところから、ローズマリーさんか他の人が、人間のことを教えに来てくれる予定だったり。本当によく似ているよ。

こうしてアサヒさんは、エンシェントドラゴンおじさんや、色々な種族の人たちに手伝ってもらいながら、ここで暮らしはじめます。

そして、すぐにここでの生活に慣れたみたいです。一般常識はもちろん、来て一ヶ月経つ頃には、

魔法もほぼ完璧に扱えるようになり、数ヶ月経つ頃には、エンシェントドラゴンおじさんと一緒に狩りができるまでになりました。

そんな生活が続いて、最初はアサヒさんの世話をするなんて面倒だと思っていたエンシェントドラゴンおじさんも、アサヒさんの規格外さも含めて慣れていったみたいです。

しかも、今まではなかなか、エンシェントドラゴンおじさんについてこられる人はいなかったけど、アサヒさんは違います。

エンシェントドラゴンおじさんは、今までも一人で楽しく生活していたものの、もっと毎日が楽しいと感じるようになっていました。まあ、そのせいで森の魔獣たちが外に逃げて、周りの街や村に被害が出て……少し、うん、少しだけ問題になったみたいだけど。

こうして楽しい日々はどんどん過ぎていき、気づけばアサヒさんがこの世界に来て十年が経ちました。この頃には、アサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんは、色々な場所へ二人で旅をしていたみたいです。

でもその頃、ある場所で最悪な事態が起きようとしていました。そしてその事態は後々、世界中を巻き込み、最終的にはアサヒさんとエンシェントドラゴンにも降りかかります。

世界中が最悪な事態に巻き込まれたとき、アサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんは、自分たちが大切に思っている者や物を守ろうと、精一杯敵と戦いました。そしてなんとかその最悪な事態は落ち着いてきて、これならなんとかなると感じていたのに……

最悪なこととは別に、ううん、全く関係ないわけじゃないんだけど、ある事件が発生します。こ

の事件が最終的に、アサヒさんとエンシントドラゴンおじさんに、永遠の別れをもたらしました。
『世界の最悪なこと、何？』

クルクルが尋ねます。

『世界中で争いが起こったのだ。闇の者たちによってな』

『やみのものの？』

今度はフィルです。

『ああ、全てを闇に包み込み、この世界に生きる者すべてに、絶望を与えようとしたのだ。自分たちの力のために、世界を手に入れるために』

「みんなや、しょによひとたちと、たたかっちゃ？」

最後に僕が訊きます。

『ああ。我とアサヒはできる限りやつらと戦った。そして、勝利まであと少しというところまできていた。だが……』

そこでエンシントドラゴンおじさんは黙ってしまいました。凄く辛そう、悲しそう、なんとも言えない表情をします。でも深呼吸をすると、元のエンシントドラゴンおじさんに戻っていました。

『我は、我のこの世界で一番の友を最後まで信用せずに、周りの者たちの声を信じたせいで、その一番の友を失うことになり、我も封印されることになってしまった』

それは、最後の一番強力な敵を倒すために、どうしたらいいか、各国の、そして様々な種族が集

まり、話し合いをしていた頃のことです。

アサヒさんはこのとき、エンシントドラゴンおじさんとは離れて、他にもまだ残っていた敵の残党を倒しに行っていたために、その場にいませんでした。

それでもアサヒさんがあの街を解放した、向こうの村を守ったって声は、聞こえてきました。エンシントドラゴンおじさんは、それを聞いて、アサヒさんを自慢に思っていたんだって。

話し合いそのものは揉めることなく終わり、最後の戦いのための時期も決まって、みんなが自分のいるべき場所へ帰っていきました。

エンシントドラゴンおじさんたちがいた国では、アサヒさんが帰ってきてから、もう一度話し合いをして、最後の戦いに備えることになりました。

でも、アサヒさんが帰ってくる一ヶ月前、ある事件の知らせがありました。それはアサヒさんが起こしたとされる事件で、すぐに事実確認が行われます。

どんな知らせって聞いたら、それは教えてもらえなかったよ。僕たちには教えられないって。でもアサヒさんはそのせいで、裁かれるかもしれないなっちゃったみたいです。

ただ、エンシントドラゴンおじさんは、その内容をとても信じていることができず、なんとかアサヒさんの無実を証明しようと、事件のあった場所や、関係している場所を調べていました。

そう、何回も何回も調べて、何かほんの少しでもおかしいことがあれば、どんなところへも行って調べたんだ。

でも、出てくる証拠は全て、アサヒさんに不利なものばかりでした。

そして、アサヒさんが帰ってくる一週間前、彼にとって不利な、決定的な証拠が出てしまいました。エンシェントドラゴンおじさんがいくらアサヒさんを信じていても、みんなに無実だって主張しても、その証拠はあまりにも完璧でした。

それでもエンシェントドラゴンおじさんは、アサヒさんが帰ってきて、ちゃんと説明してくれれば、疑いは晴れると信じていました。

やがて予定通り一週間後に帰ってきたアサヒさんはすぐに捕らえられて、取り調べを受けることになりました。

もちろんアサヒさんは、今回の事件について、もう知らせを受けていました。だからその疑惑について否定しました。

その否定を聞いて、エンシェントドラゴンおじさんは少し安心したそうです。でも取り調べが進むにつれ、だんだんとアサヒさんの様子や証言がおかしくなってきたんだとか。ただ、無実ってことだけは、変わらずに主張していました。

エンシェントドラゴンおじさんはまた不安になってきました。このときエンシェントドラゴンおじさんは、取り調べのときは必ずそれに参加してみたいのです。

相手は大切な相棒のアサヒさんだからね。アサヒさんをよく思っていない人たちも、この国には少なからずいて、その人たちが嘘の証拠をでっち上げる可能性もあったから、それを見張っていたという話です。

そしてその日も取り調べが終わって、アサヒさんと少しだけ話す時間がありました。そのとき話

したことは――

「俺は何もしていない。だが証拠は……俺がやったという証拠が集まりすぎている。もしかしたら俺はこのまま捕らえられたままになる可能性も」

『諦めるんじゃない。我がやつらが文句の言えないほどの、お前の無実の証拠を見つけてやる』

「ありがとう……だけど、もしこの後も、俺に不利な証拠が出てきても、どうかお前だけは、俺を信じてほしい」

『ああ、絶対に。我はお前を信じる』

そんな話をした後、二人で冒険をしていた、楽しかった頃の話をして、その日は別れました。でもその次の日――

どうにも覆せない証拠が出てきました。その証拠はエンシェントドラゴンおじさんも認めるしかないほどの完璧に証拠です。

現場に行つてその証拠を確認したエンシェントドラゴンおじさんは、前の日に信じるって約束をしたのに、信じるのができなくなっていました。

でもね、その証拠が出た後もアサヒさんは、ずっとエンシェントドラゴンおじさんに信じてくれて訴えていたみたいです。結局最終的には、アサヒさんは今敵対している相手を倒し次第、刑を受けることになりました。

それが決まっただけで、アサヒさんにいくら話したいって言われても、エンシェントドラゴンおじさんは、ずっとアサヒさんを無視しました。そして何も話さないまま、ついに敵の本拠地へ攻

め込むことになります。

どんどん敵を倒していくエンシェントドラゴンおじさんとアサヒさんと、そして同じ国の人々に、他の国の人々。最初は優勢でした。でも相手だつて、そのまま黙っているわけがありません。

戦いが始まってから半分くらい敵を片づけたときに、相手の反撃が始まり、こちら側にかんりの被害が出ました。そのまま相手の攻撃は止まることがなく、せっかく半分まで攻め込んでいたのに、かなり戻されちゃったみたいです。

あぐく、相手のあまりの恐ろしさに逃げ出す国まで出てきたそうです。戦況はどんどん悪くなつていきました。

そんな中、やっぱり立ち上がったのは、アサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんです。戦っている中で、二人より力がある人たちはいなかったからね。だから二人は先頭に立って、力の限り敵を攻撃しました。そしてなんとか形勢は逆転。ついに敵の親玉との対決になります。

親玉との対決は、今まで以上に大変でした。親玉を倒せば全てが終わるのに、どんどん仲間がやられていき、やっと親玉に一撃を入れられるという頃には、エンシェントドラゴンおじさんもアサヒさんもボロボロでした。

そしてついに、相手の親玉を倒すときがやってきました。同時に、エンシェントドラゴンおじさんとアサヒさんの別れのときも……

アサヒさんが最後の攻撃をしようと、親玉に飛びかかったとき、どこにそんな力が残っていたのか、親玉はこれが最後とばかりにアサヒさんを攻撃しました。

アサヒさんはもう攻撃態勢に入っていて、エンシェントドラゴンおじさんに援護を頼むって言うただけ……

エンシェントドラゴンおじさんは、一瞬反応が遅れてしまい、アサヒさんは親玉の攻撃をもらうに受けちゃいました。

ここ一ヶ月以上、アサヒさんを見捨てていたエンシェントドラゴンおじさんは、アサヒさんの声にとっさに反応することができなかったんです。

エンシェントドラゴンおじさんの前に、アサヒさんがドサツと落ちてきました。そこでエンシェントドラゴンおじさんはハツとします。

すぐに、もはや動けなくなっていた親玉に止めを刺し、世界を救うことには成功しました。でも……

フラフラとアサヒさんのもとへ戻るエンシェントドラゴンおじさん。アサヒさんを抱き起こし、怪我を確認します。アサヒさんの傷は、回復魔法では治せないほど酷い状態でした。治せないということは、アサヒさんは……

何度か声をかけると、アサヒさんはなんとか意識を取り戻したんだ。

「……やつは？」

『大丈夫だ、我が止めを刺した』

「……そうか……お前と話すのも、久しぶりだな」

本当にそれは久しぶりの会話で、そして最後の会話でした。

「……まったく、お前がずっと無視してくれたから、ぜんぜん話せなかったじゃないか」

『……』

「……ははっ、その様子だと、今も本当は話したくないって感じたな。まあ、最後だと思って俺の話を聞いてくれよ。どうせ、これが最後なんだから」

『……分かった』

アサヒさんの言う通り、これが最後の会話になることを分かっていたエンシェントドラゴンおじさんは、話を聞くことにしました。

このときエンシェントドラゴンおじさんは、なんとも言えない気持ちだったって。十年もずっとともに過ごしていて、色々な場所へ冒険に行って、楽しく過ごしていた日々。でも数ヶ月前に起こった事件によって、あれだけともにいたアサヒさんと、まったく話をしない時期が続きました。

久しぶりに近くで聞いた、アサヒさんの声は、なぜか今までで一番、しっかりと聞こえていた気がしました。

「……俺は、みんなが、お前がなんと言おうと、そしてどんな証拠を突きつけられようとも、絶対にあの事件に関わってはいない。絶対だ」

『しかし、あれだけの証拠、どこの誰が見ても、お前がやったとしか……』

「……ハイエルフとエルフたちは、今も事件について調べてくれている」

『っ!! あやつらも我と一緒に、お前を犯人だと……!!』

「……そう言うっておかなければ、動くことができないからってさ。俺が犯人だと決まったその日の

夜に連絡をくれた。真犯人に気づかれないように、俺がやっていない証拠を探してくるから、それまでなんとか時間を引き延ばせてな」

『やつらがそんなことを……』

この頃、エンシェントドラゴンおじさんとアサヒさんは、ハイエルフとエルフたちと、とても仲がよく、敵が攻めてくる前は、ちよくちよく彼らのところへ遊びに行っていたそうです。

そのハイエルフとエルフたちは、事件でアサヒさんが犯人と決まった日から、エンシェントドラゴンおじさん同様、表向きアサヒさんとはまったく接触していませんでした。アサヒさんが犯人で決まりだっって言っただけ。

でも本当は、誰にも気づかれずに、アサヒさんの無実の証拠を探してくれていました。アサヒさんを信じているから、絶対にアサヒさんがそんなことをするはずがないからって。それにね、とっても怒ってみたいだよ、エンシェントドラゴンおじさんのことを。どうして今まで長い間、ともに過ごしてきたエンシェントドラゴンおじさんが、最後までアサヒさんを信じないんだって。相棒だろうって。ううん、もうここまでくれば家族だろうって。

「……まったく。俺はお前のことを最高の相棒だと思っていたし、なんならもうとくに家族だと思ってただけだな。そんなふうに思っている相手に、無視されるのはキツかったぜ」

それを聞いたエンシェントドラゴンおじさんは、ハッとしました。相棒、家族。確かに最高の相棒だと思っていたけど、相手は家族とまで思ってくれていたなんて。しかも、ハイエルフやエルフたち、他の人たちからも、そう見えていたなんてって。

アサヒさんが来るずっと前、何百年も前から生きてきたエンシェントドラゴンおじさんは、ずつと一匹でした。そんなエンシェントドラゴンおじさんにできた、初めての最高の相棒、そして今言われた家族です。

なんであの日々の気持ちを忘れていたのか。あれほど楽しく、こんな生活も悪くないと、あえてアサヒさん本人には言っていなかったけど、アサヒさんと出会えてよかったと思っていた頃のことを。

『アサヒ、我は……』

「……まあ、どっちにしても、間に合わなかったけどな。お前とももうすぐお別れだ……いいか、俺が今から言うことを、よく聞いておけよ」

『……』

「……今回の事件、どうにもおかしいことが多すぎる。俺に不利な証拠ばかり、いや違うな、俺がやったという証拠しか出ていないこと自体がおかしいんだ。少くくらしい他の証拠が出てもいいのに。それに、俺たちを気に食わない連中が、俺を執拗に取り調べるのは分かるが、俺たち側の人間たちの中にも、無理やり俺に事実を認めろと言ってきたやつらもいた」

あのね、アサヒさんに自分が犯人だと認めろと言ってきた人たちの中には、アサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんと、とても仲のいい人たちもいたんだって。

アサヒさんはそのときの様子に、とっても違和感があったみたい。こう、言葉にはできないんだけど、気持ち悪い何かが。

どうも、みんながアサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんを、引き離そうとしているようにも感じたみたいです。

アサヒさんが捕まってから、エンシェントドラゴンおじさんは、毎日彼のところに来ていました。でも、無実の証拠探しもしていたから、取り調べには遅れてくるときもあったし、立ち会えないときももちろんありました。そんな日は、寝る前に会いに行っていました。

それでね、そんなときに、アサヒさんがエンシェントドラゴンおじさんのことを、他の人に尋ねると——今は自分の仕事をしているとか、国の仕事をしているとか、大事な仕事の最中だからアサヒさんのところに来ている暇はないんだろう、なんて言ったそうです。

あげく、もうアサヒさんが犯人だと思って、証拠を調べても、アサヒさんに会っても仕方ないから、他の仕事をしているんじゃないか、なんて酷いことまで言ってきたみたいです。

でも実際は、必ず夜遅くともエンシェントドラゴンおじさんは、アサヒさんが起きているうちに会いに来て、その日に調べてきたことを伝えていました。

それでね、一度だけだったんだけど、そんな夜遅くに話していたアサヒさんとエンシェントドラゴンおじさんを見て、仲のよかった人の一人がほんの一瞬だけとっても嫌な顔をしたんだって。

『やつらがそんなことを……？』

「……そのときは、なんでそんなことを言うのか、そうしてどうしてそんな顔をしたのか、俺もよく分からなくてさ。でもどう考えてもおかしいだろう？ わざと俺たちが、お互いを信用できなくしようとしているって感じださ」

『……わざと信用をなくす』

「……それで、その話をお前にしようとしていたら、お前に無視されるようになったんだよ」

エンシエントドラゴンおじさんは、なんとも言えなくなりました。

久しぶりにしっかりとアサヒさんと話したことで、エンシエントドラゴンおじさんは、再びアサヒさんは無実じゃないかと思えはじめました。

でも、やっぱり今まで自分で調べてきたことは、アサヒさんが犯人だと示していたせいで、信じられません。

そんな複雑な感情が、エンシエントドラゴンおじさんの心をかき乱す中、アサヒさんはついに――

「ぐっ、ゲホッゲホッ!!」

『アサヒ!!』

「……はあ、どうもそろそろらしい。本当はもつとお前と話したかったんだけどな……いいか、証拠は俺が犯人だと示している。だが、これだけはもう一度はつきり言っておく。俺は何もしていない」

『……』

「……本当は無実を証明して、お前との関係も修復したかったが、もうできないみたいだ」

『アサヒ、我は……』

「……さつきも言ったが、誰かが俺たちを引き離そうと、そしてお互いを疑うように仕向けている可能性が高い。そして、うまく俺たちを排除しようとしている。いいか、俺がこのまま死ねば、次にターゲットにされるのはお前だ」

『……』

「周りの人間たちに気をつける。仲がよかったのに、今は俺たちに嘘の報告をしていたやつらにもどんなことを言われても疑ってかかるんだぞ。きつとハイエルフとエルフたちがお前の力になってくれるはずだ……頼んでおいたんだ、お前のことを。手を貸してやつてくれって」

『……』

「お前はなんでも一匹で片づけようとするからな。いくら頼ってもいいって言ってるのにさ。だから頼んでおいたんだよ……何が起きているか分からない。自分の命を守るためにも、本当に周りには気をつけるよ」

『……ああ。ああ!』

そう言ったときのアサヒさんの声は、とつてもしつかりといたそうです。ただ、どんなアサヒさんの目から、光は失われていきました。

「ゴホッ、ゲホッ!!」

『アサヒ!!』

「……俺はお前と相棒になれてよかった。二人での冒険の日々は俺の大切な思い出。それと、これについては、俺はさつきはつきり言ったけど……まあ、お前がどう思っているか知らないが、俺